
放課後の一幕

ま～ちん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後の一幕

【ZPDF】

Z0090T

【作者名】

ま～ちゃん

【あらすじ】

ツンデレ好きな少女につき合わされツンデレの話を聞かされる主
人公。実はそんな彼にはツンデレな幼馴染がいて……。そんな三人
のちょっとした放課後の一幕。

放課後の一幕

友達から借りた漫画でツンデレといつものを見た。

この漫画のツンデレキャラは、最初ツンの時は主人公に辛く当たるのだが、仲良くなっていくとだんだん素直になつてゆき、主人公が他の女の子と一緒にいると露骨に冷たく当たつて、最後の方にデレという状態になると最初のキャラと同じか疑うような熱々カッフルになつていていう感じだった。

最初読んでいたときは漫画の主人公に親近感を覚えていた。ツン時代のヒロインが主人公に辛く当たるところが自分と被ったからだ。俺には漫画でいうところの、一つ下の妹のような幼なじみがいる。といつてもこの漫画のように主人公を兄の様に慕い、甘えてくるような可愛い性格ではなく、さつき言つたツンデレのツンのみを出しているような奴で年上の俺を全く年上扱いせず、かといって友達扱いでもなく、俺のこと完全に見下しては、大体あいつは背が低いくせに態度はでかいし……（以下略）……途中からなんか愚痴になつたな。

あいつとは彼氏彼女の関係になりたいわけではないが、年上として慕われるぐらいには『でしてくれればと、読み終えた漫画のページを捲りながらそう思った。

放課後の教室。辺りが夕焼けで赤く染まりだそうとし始めている時間、俺、『日野鍵一』は目の前にいる女の子と一人きりだった。

「べ、別にあんたのことなんか好きでもなんでもないんだからね。
勘違いしないでよね」

彼女は夕焼けのせいか少し頬を赤く染めながら言つ。

俺はいつもと違う彼女の表情に一瞬驚いたが、それでも、なんとか俺は彼女にこの気持ちを声に出して言つことにした。

「……なに言つてんだ。お前」

「いやいやー。一回は言わないといけないかなー、と思つて」

さつきまでの表情が嘘のよつこひつと変わる。いや実際冗談か何かなのだらう。

「一度はこんな台詞言われてみたいと思わない？」

「いや、結城と会つまでそんな台詞があること自体知らなかつたよ」

そう言つと彼女は「こんな有名な台詞なのになんで…？」とか驚いた風に言つが、それは一部の人限定だと思つぞ。

彼女は『結城夕』俺のクラスメイトで一応友達。

顔立ちもよく人望もあるので男女問わず人気がある。が、これまでの台詞を聞く人が聞けばわかるかもしけないが彼女はオタクである。

「シンデレの女の子が頬を赤く染めてさつきの台詞を言つてくれた
ら……とか思ったことないの」

「無い。シンデレの単語 자체、最近やつと知ったぐらいだからな

結城は不満そうな顔をするが、一般人にオタク会話をついていけとこうのが無理だと思う。

一応友達と言つた理由は、なぜか俺にオタク知識を披露していくしかなくなるからだ。前にツンデレ喫茶に何の予備知識もないまま連れて行かされた時、俺は終始混乱状態だった。その隣では結城は満足げな表情を浮かべていたのを今でも覚えている。

「あの時は大変だった

「ツンデレ喫茶のこと? また行こうね。こんどはなーちゃん誘つて」

結城は活き活きと言うが、俺としては一度と行きたくない。それにあいつは誘つてもまず行かないだろう。

俺の乗り気じゃない態度を見てか、結城はため息をつくと俺の方に視線を向けてきた。普段が普段なので忘れがちだったが、彼女は普通に可愛い部類の容姿に入る。そんな彼女と視線が合うと、俺は少し顔が赤くなるのを感じたが、そんな状態も長くは続かなかつた。

「ツンデレな幼なじみがいるのに、日野君はどうしてツンデレに興味が無いの」

視線が合つてもいつも通りの会話で、顔の火照りもすぐに冷めてきた。

「どうしてって言われてもな

結城の言う幼なじみは『上月奈菜』俺の幼なじみで一つ下の女の子。結城は何故か、なーちゃんと呼んでいる。

小柄で強気で、なぜか不機嫌そうな顔つきで俺につつかかってくる奴なのだが、結城に言わせると、「そこが良いんじゃない」だそうだ。

「！」の前貸した漫画見たよね。あれを見て何か思つといろはないの「思うところか？ そういうええば、あの漫画にあるよつた台詞を奈菜が言つていたよつな」

そう俺が言つと、結城の表情が変わった。例えるなら特大のネタを見つけた記者のような表情に。

「それはいつの話。どんな状況で。なんて言ったの。言つて、教えて、聞かせて」

よほど興味があるのか、目を輝かせて、口調が早口になり、興味津々というのが伝わつてくる。その様子に俺は少したじろいだが、気を取り直してそのときの話をすることにした。

あれは中学のときの話だつたか……

（回想 中学時代）

午前の授業が終わつて昼休み。

「昼休みになると毎度思つんだが
「なによ」

教室では昼食をとる人たちで軽く盛り上がる中。俺の机で何故か昼食をとつてゐる奈菜に向かつて言ひや。

「なんでわざわざ俺の所に来て昼飯を食つんだ
「別に、あたしがお昼をどう過ごしてもいいでしょ」

俺の質問にそつこなく答えると弁当を食べ始める。ちなみに奈菜の食べている弁当は奈菜が自分で作ったものだ。

「」の学校は給食がないので昼食をとる方法は昼食を持参するか、購買でパンを買つかの一つ。だから昼休みになると自由行動になるのでどこで昼食をとつても構わないことになつてゐる。だからこそで昼食を食べることはないのだが……。

「そりゃやうだナゾ、なんぞわざわざ上級生のクラスまで来るんだ」

回半年の別のクラスならともかく、毎回上級生の俺のクラスまで来るのがわからぬ。

「べ、別ひじうだつていいでしょ」

じうやう言いたくないらしく、そつまを向いて奈菜は答える。
あんまり深く聞いても怒りそつだし気にしないようにしよう。すでに奈菜の顔が少し赤いし、これ以上立たたくないし。

下級生が上級生のクラスに来るだけで充分に立つ、そのせいか周りからの視線や、冷やかしの声などが俺に集まる。人間こうやって有らぬ誤解とか噂が生まれていくんだな。そつ思つと自然と疲れてくれる。

「む、何ぞの顔」
「ん。ああ、悪い」

どつやう表情に出でいたらしく。

「お昼食ぐるとき」そんな辛氣臭い顔しないでよね

奈菜は文句を言こながら弁当に箸を伸ばす。

「悪い悪い。周りからお前と付き合つてるとか思われていろと思つ
と、どうもな」

「へ？」

奈菜は何を言われたか理解出来てないようで、きょとんとした顔になつたと思つたら、顔が一気に真っ赤になつた。

「な、な、何それ、あたしはべ、別にあんたのことなんてなんとも……って、なんでそれでそんな顔になるのよ！」

奈菜は顔を真っ赤にしたまま怒鳴つてくれる。怒鳴る理由もわかる、確かに聞き様によつては失礼だな。

「少し仲が良いだけで付き合つてるとか冷やかされたら普通嫌だる。お前もそう思うだろ」

「あ、あたしは別に……あんたなり」

奈菜の顔は真っ赤のままだが、さつきまで怒鳴り声が無くなり、声は聞き取れないぐらこまで小さくなつた。

「どうした？」

「な、なんでもないつ。そんなことより、早くお昼食べなさいよ。出してもないじゃない」

奈菜は「まかすよ」な感じで毎飯の話題を振る。

確かにいつもなら購買に行ってパンを買って、教室で食べているが、今日に限つてはそつではなかつた。なぜなら……。

「飯か？ 財布忘れたから、今日は毎飯抜き」

あっけらかんと答える。

「……はあ、なにやつてんのよ」

奈菜からため息混じりに呆れたような目で見られる。実際呆れているだろ？。

「忘れたもんはしようがないだろ。とこつわけで俺は寝る」

そう言つと俺は机につづつして昼寝をする。

時間はまだあるし、しばらく寝むれ、そう……だな。

そう考えてこくうちに意識が眠りの方へと進み、意識が閉じ始める。が、突然頭に殴られたような痛みが走った。痛みで一気に眠気が覚め、目を開けると、拳を握り締めている奈菜の姿があった。どうやら本当に殴られたらしく。

「ちよつと、何でいきなり寝始めるのよつ

「何も殴ることないだろ」

殴られた頭をさすりながら抗議する。

「あなたの寝顔を見ながらお昼を食べるなんて嫌なのよ、
「しようがないだろ。動くと腹減るし、図書室で読書なんて柄じゃ
ないし」

そう言つて再び机につづつして寝始める。

「だから寝るなつ」

また頭に痛みが走る。なんでいちいちいつ暴力的なんだろ？。頭をさすりながら頭を上げる。

「じゃ、どうしようと」

「し、しかたないから、あたしのお弁当わけてあげるわよ」

奈菜は微妙に俺から皿を逸らしながら言つた。

「か、勘違いしないでよね！ 別にあんたのためとかじゃなくて、あんたの寝顔を見ながら食べるのが嫌なだけなんだからねー。」「いや、何も言つてないけど」

そんなに俺の寝顔は見るに耐えないものか？

嫌なら別の場所で食べればいいんじゃ、と思つたが、ここで変なことを言つて昼飯を食べる機会がなくなるのは嫌なので黙つておいた。

「ほんとにいいのか？」

「いいわよ。はい、割り箸

「お、準備いいな」

「あ、あんたと一緒にしないでよね」

奈菜は弁当の蓋に俺の分の「」飯とおかずを分ける。

「はい、ありがたく食べなさい」

「じゃ、ありがたく。いただきます」

「うん、美味しい」

挨拶を済ませると割り箸を伸ばし分けてしまつた弁当を食べる。

「ほ、本当に？」

「お前の飯が美味しいのは昔から知ってるからな。これなら、いつ財布忘れても大丈夫だな」

「な、何よ、もう分けてあげないわよ」

「冗談だ、冗談。さすがに悪いからな」

「で、でも、あんたがどうしてもって言つなら、こ、これからは……」

奈菜が急に俯いたかと思うと、声のトーンがどんどん小さくなり最後の方はなんと言つたのか聞こえなかつた。

「なんか言つたか？」

「べ、別に何も言つてないわよ。片付かないから早く食べてよね」

「わかつたわかつた」

こんな感じで昼休みが過ぎていつた。弁当を食べている間、なんとなく奈菜がいつもより上機嫌だった気がした。

（回想終）

「ど、まあ感じなんだが、確かに似たような台詞を言つてるかもな」「う～、生でその光景を見たかったよ～」

本当に残念そうな表情で声を出す結城。
そんなに残念か？　この会話を聞けないことが。

「中学違つから仕方ないだろ」

「はあー、日野君と同じ中学になりたかったよ」

今でも奈菜は俺のクラスまで来て昼食を食べるが、前よりは落ち着いて昼食をとっている。俺として構わないのだが結城としては「なんか物足りない」だそうだ。

「つまり、日野君はもうシンデレに飽き切ったんだね」

「何でそういう会話になるんだ」

突拍子のなことを言われる。そもそも飽きる、飽きない以前に興味が無いんだが。

「だつて、シンデレな幼なじみがずっといるのに、シンデレに興味なさそうだし」

「そりや、興味が無いからな」

そうとしか言いようがない。それにシンデレって好意のある相手に対してだつたはずだし、だとするとあにつけシンデレじゃないだら。

「それじゃ、シンデレに飽きた日野君はどんな人が好み？ 妹っぽいの？ 姉みたいな人？」

「普通、年上とか年下とかじゃないのか？」

同じような意味のはずなのに、何故かユアンス的に別のものを感じる。

「それで、どっち？ それとも他に好みのタイプとかある？」

結城は好奇心を隠そとせずに聞いてくる。
「どうか、言つほど好みなんてない気がする。じいていうなら。

「普通、かな」

「普通？ ん~……あ、地味っ子」

「たぶん思つているのとは違うと思うが、とりあえず普通だ。ツンデレとか、一部の人限定の知識を熱烈に語つたりしないような奴だよ」

後半は遠まわしに結城のことだが、少なくともそつちに關しては好みじゃない。

「……ふーん、そつか。ちょっと残念かも」

「何が？」

「ん？ ん~、やつぱりツンデレが好みじゃないみたいだから残念だなつて」

「好み以前の問題だつて。そろそろ帰るぞ」

「あ、ちょっと待つてよ、私も帰る」

結城が鞄を準備するなか、俺は教室を出て先に歩き出した。
さつきより夕日は少し沈んでいて辺りは少し暗くなっていた。教室の方から結城が出るのがわかつたが気にせず昇降口に向かった。待つていても、先に行つてもうるさそうだし。放課後の下校イベントとか、よくわからないうことを言つてうそうだし、さつさと帰るか。

昇降口を出て、校門の所で結城に追いつかれたところで、見慣れた人物を見つけた。

「ん？ 奈菜どうしたんだ」

「あ、なーちゃんだ」

「た、たまたま掃除の時間が長引いて、遅くなつただけで、べ、別にあんのこと待つてたわけじゃないんだからね」

夕日が沈みかけている時間まで掃除が長引くはず無いだろ？と思つたが、それにしつこみを入れると経験上面倒なことになりそこので流しておく。

「そうか、それじゃ帰るか」

「う、うん。別にあんと帰りたいわけじゃないけど、暗くなつてきてるし、最近は物騒だから仕方なくなんだからね」

確かに暗くなつてきたし送るのは当然だろ？。家も近いし別に苦でもないからな。

送ることを了承すると、結城の方をどうするかと思いつめてみると、妙に幸せそうな顔をした結城がいた。

「これつてシン期から、『テレ期に突入かな

「……知らねーよ」

（帰り道）

「それじゃ、なーちゃん。一緒に帰るー」

「なーちゃんつて呼ばないでください。あと、なんで結城先輩がいるんですか？」

「ふつふつふ。実は今まで日野君と教室に居たんだよ。一人つきりで」「なつ」

どこか楽しそうに語る結城と、何故か驚いている奈菜。あいつが驚くような話題、今の話にあつたか？

「ねー」

「むー」

結城には同意を求められるが、同時に何故か奈菜に睨まれる。俺なんかしたか？

そんなことを考えていると結城が俺の所に近づいてきて耳打ちをした。

「やっぱり、シンデレに関して理解が足りないみたいだね。また教えてあげるよ。普通の子以外も好みになつて欲しいし

「え？」

「田の前でこそ話をするなー」

そう言つて奈菜から腹の辺りを鞄で思いつきり叩かれる。情けがあつたのか鞄は角の方ではなかつたが、それでも充分に痛い。そんな光景を結城は「シンデレっていいねー」と満足そうに見ていた。とりあえず俺はシンデレといつもの知つたが、俺の周りのシンデレを語る奴も、シンデレらしい奴のことも俺は全然理解できそうにないと、何故か怒っている奈菜と、満足そうに眺めている結城を見てそう思った。

終わり

(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。
ツンデレをテーマに書いたところ、友人から直球過ぎるとコメント
をもらった作品。
ツンデレって奥が深いんだなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0090t/>

放課後の一幕

2011年6月18日18時24分発行